



救済委員からのメッセージ

ー子どもの権利への理解と社会の責任ー

札幌市代表子どもの権利救済委員 品川 ひろみ

子どもアシストセンターは、子どもの権利救済を担う機関です。そのためアシストセンターの活動を文書などで表現する時には「子どもの権利を守る」機関なので、「子どもの権利を守るとはどういうことか」という論調になりがちですが、中には「子どもは厳しい環境で育つことも大切ではないか」、「権利ばかり主張するのはどうなのか」というご意見を持つ方もいらっしゃるかもしれません。そこで今回は、なぜ子どもの権利が大切なのか、その本質を共有したいと思います。

子どもの権利は、単なる主張ではなく、子どもが健やかに成長し、将来を生き抜く力を育むための「土台」となるものです。もしその土台となる権利が守られなければ、子どもたちにどのような影響が出てしまうのでしょうか。そこでここでは、数ある権利の中でも、特にご相談が多い以下の３点に絞り、その重要性を具体的にお伝えします。

① 遊び・休息の権利について：生きる力を育む「学びの場」

【権利の内容と重要性】

子どもにとって遊びや休息は、単なる「余暇」ではなく、心身の回復を促し、自分で自分を調整する力を育てる「成長の基盤」です。遊びを通して、子どもは面白さや楽しさを追求し、物事に集中して取り組む力や、失敗してもまた挑戦できる気持ちを育みます。また、友だちとの関わりの中で、喜びや傷つきを経験し、他者とのコミュニケーションのあり方を学んでいきます。

もしも権利が侵害されると…

過度な学習負担や習い事などで遊びや休息の時間が奪われると、子どもは慢性的な疲労やストレスを抱えやすくなります。自分のペースで試行錯誤する経験が乏しくなり、「失敗しても大丈夫」という感覚が育ちににくくなります。その結果、無気力や情緒不安定といった形で現れたり、将来、困難に直面した際に立ち直る力を持てない大人につながる恐れがあります。

また、子ども同士の小さなイザコザも、大切な学びの機会です。すべてに親が関与してしまうと、子どもは「自分の思い通りにならない状況」を受け入れられなくなったり、自力で問題を解決する力を失ったりしてしまいます。子ども同士の社会の中で、葛藤し、自ら解決策を見出していくプロセスこそが、自立に向けた不可欠なステップなのです。

② 安心・安全に守られる権利：成長のためのエネルギーを確保する

【権利の内容と重要性】

子どもが安心できる環境にいることは、心身の健やかな発達に不可欠です。子ども同士の問題もイザコザを超えていじめに発展したり、暴力、過度な叱責、情緒的に不安定な養育、予測不可能な大人の言動などは、子どもにとって「安全が脅かされる経験」となります。子どもは安心できる環境にあってはじめて、いろいろな経験に挑戦することができます。つまり安心・安全が守られることは子どもが成長していくときに絶対的な条件の一つと言えます。子どもは自分の身を守る能力がまだ発達途上にあるため、安心・安全な環境を提供することは大人の重要な責任です。

もしも権利が侵害されると…

安心・安全でない環境（学校でのいじめ、家庭でのDVや虐待、親の不仲など）に置かれると、子どもは常に緊張状態にあり、生きるエネルギーの大部分を「目の前の危険を回避すること」に費やしてしまいます。その結果、本来向かうべき学び、遊び、他者との健全な関係を築くための余裕が失われます。不安や恐怖の経験は、過剰な警戒心や対人関係不信、自己否定感につながり、「世界は信頼できない場所だ」という根強い前提を子どもの内面に残すことになります。

この影響は一時的なものではなく、人格形成や将来の社会との関わりに深く及びます。

③ 意見表明権：自分の人生に関与する力を育む

【権利の内容と重要性】

自分の気持ちや考えを表明し、聴いてもらえる経験は、「自分の人生を自分で選択し、関与していく力」の土台となります。人は人生のなかで多くの岐路にありますが、その時に自分でその道を選べることは大切であり、それには幼いときからの経験が影響します。自分の意見を言ってもよいという経験はとても重要です。子どもは自分の意見を言葉にすることで、自尊感情を育み、社会と関わる力を身につけます。

もしも権利が侵害されると…

意見を聴いてもらえない経験が積み重なると、「どうせ言っても変わらない」という無力感が生まれ、「自分から語らないこと」を学習してしまいます。

子どもの時期には沈黙や問題行動として現れます。また将来、不当な扱いに遭っても声を上げられない大人になることにつながります。意見表明権の侵害は、子どもから「自分の人生に関与する力」を奪う深刻な問題なのです。

アシストセンターへの相談から

「遊び・休息」、「安心・安全」、「意見表明」の権利が守られない環境で育った子どもたちは、次第に「感じること」、「休むこと」、「語ること」を手放していきます。

実際に、アシストセンターには、「毎日忙しくて疲れた」、「学校の友だちにいじめを受けている」、「言ってもどうせダメ」といった、これらの権利侵害に根ざした相談が数多く寄せられています。不登校や対人関係の悩みなど、本来なら楽しいはずの日常が苦痛になっている子どもの現実があります。

また親が自分の活動のすべてに関与しすぎ、生きることに辛さを感じるという子どもからの相談もあります。多くの大人は、その子にとってよいと考えて、子どもに多くの助言をしていますが、それが逆効果になることも少なくないのです。

そこで忘れてならないのは、子どもという人として未成熟な段階にある子どもにとって、何が最善であるかという視点です。子どもは、発達途上にありこれからも成長し続ける存在です。その子にとって「もっとも望ましいこと」は、いま現在の行動が大人にとって「良い子ども」ではなく、大人になった将来、生きていける基礎となるものであることが望まれます。

子どもの権利を守ることは、子どもの「人生に関わる力」を守り育むことです。そして、それはすべての子どもが未来を生き抜くための社会全体の責任であると、私たちは考えています。しかしそれは簡単なことではありません。また特定の人だけが責任を負うことでもありません。その子どもの周りの大人が信頼関係を基盤として、ともに子どもの権利を大切にするという視点をもち協力することが大切であると考えます。

おわりに

ここまで見てきたように、「遊び・休息」、「安心・安全」、「意見表明」の権利は、子どもが将来、困難を乗り越え、自分の人生を歩む力を育むための「成長の土台」そのものです。アシストセンターに寄せられる「疲労」、「いじめ」、「無力感」といった相談の多くは、この土台

となる権利の侵害に根ざしています。

私たちは、子どもの「今」の行動が大人にとって都合の良いものではなく、子どもが大人になった将来、自立して生きていける基礎を育むという視点を大切にしなければなりません。具体的には、子どもの気持ちを出発点とし、大人と子どもの信頼関係を基盤として、どこまで関与するかを子どもと一緒に考えることが求められます。

子どもの権利を守り育むことは、すべての子どもが未来を生き抜くための社会全体の責任です。アシストセンターは、その一翼を担い、子どもの「人生に関わる力」を守る活動を続けてまいります。この活動が、一部の人ではなく、子どもの周りの全ての大人の協力によって支えられるよう、今後もアシストセンターの活動にご理解とご協力をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。



救済委員からのメッセージ

札幌市子どもの権利救済委員 朝倉 靖

1 はじめに

子どもアシストセンター（以下「アシストセンター」といいます。）の子どもの権利救済委員の朝倉です。2024年4月より救済委員を務めさせていただいておりますので、2025年度は就任2年目となります。就任1年目は無我夢中でした。2年目になるとある程度慣れてくるのではと思っていましたが、そう簡単にはいきません。アシストセンターに寄せられる相談は多種多様であり、1件ごとそれぞれに相談の要点が異なり、「こういう相談にはこういう対応をすれば大丈夫」というような単純なことにはなりません。その意味では、より一層子どもの権利に寄り添うことの重要性和、その難しさを感じる1年になったように感じています。

当たり前のことですが、大人もかつては子どもでした。でも、大人になると子どもの頃の気持ちを忘れてしまいがちになるものですね。私もそうだったと思います。しかし、アシストセンターの救済委員を務めるようになり、日々、子どもたちの悩みに接することで、次第に子どもの頃の気持ちがよみがえってきたように感じています。例えば、小学生の子どもから「仲間外れにされているような気がする」、「苦手な友達がいて悩んでいる」といった相談があります。子どもにとってはもちろん切実な問題です。私自身も、多かれ少なかれ、子どもの頃に同じような気持ちになったことがあります。皆さんの相談を聴いていて、そんな昔の自分の記憶や感情が、海馬か大脳皮質か扁桃体かわかりませんが、脳のどこかから引っ張り出されてきます。不思議なものですね。かの「星の王子様」の冒頭の献辞で、サン・ティグジュペリは、「大人は誰もはじめは子どもだった（しかし、そのことを忘れずにいる大人はいくらもない）」と書いていますが、最近の私は、子どもだったことを少し思い出すことができたようです。そんな私がこの1年間で感じたことを述べさせていただきます。

2 大人の関わり方の難しさ

例えば、学校の中で子ども同士のトラブルがあったようなとき、親をはじめとする大人が、子どもたちの問題にどのようにかかわっていくべきか、とても難しく感じます。学校での問題であれば、基本的には教員が対応することになるでしょう。しかし、教員の対応に納得がいかな

かったり、トラブルの相手方の子の親の対応が思ったようなものではなかったりすると、学校と親との間、あるいは親同士の間に対立構造が生じてしまい、なかなか解決の糸口を見いだせないケースに発展してしまうことが、しばしばあるように思います。もちろん、ひとことで子ども同士のトラブルといっても、学校の指導などで比較的容易に解決に至るケースから、深刻ないじめ問題まで様々なものがありますので、どのような対応が望ましいかはケースバイケースというほかありません。また、親にとって、自分の子が学校でつらい思いをしていることはとても耐えがたいことであるのは当然です。私も子育ての経験を持つ親として、その気持ちはよくわかります。どの親も、自分の子どもが楽しく学校生活を送ることができるよう強く願います。先生方も児童・生徒たちが学校で仲良く過ごせるように一生懸命に心を配ります。しかし、それぞれの思いがすれ違ってしまえば、残念ながら上記のように、对学校、親同士に対立的な関係が生じてしまうこともあります。

そのようなときに大切なのは、「子どもにとって何が一番よいのか」、「本当の意味で子どもの最善の利益とは何なのか」という視点だと思います。親が学校等に不信感を抱いてしまうと、ときとして肝心の子どもが置き去りになってしまうことはないでしょうか。「子どもにとって何が一番よいのか」という視点で物事を考えるならば、本来、親と学校が「同じ方向を見る」のがあるべき姿なのだと思います。

3 子どもの信頼を得るためには

アシストセンターは、幅広く広報をさせてもらっています。ただ、学校でアシストセンターのカードが配られたからといって、すぐに子どもたちがアシストセンターを信頼してくれるわけではありません。日々寄せられる相談の中にも、いわば「お試し」のようなものや、一見ふざけているだけのように思えるものも、一定程度見受けられます。初めの頃は、正直なところ、私も限られた相談回線を「お試し」や「おふざけ」でふさがれてしまうことに、少し眉をひそめるような気持ちもありました。でも、最近では、もしかしたらそのような相談の背景には、実は、深刻な悩みが潜んでいるかもしれない、と思うようになりました。相談をするということは、とても勇気のいることです。子どもたちは試しながら、この大人たちは本当に信頼できるのか考えているのかもしれません。そして、信頼できると思ったら、これまで打ち明けられなかった悩みを話してくれるかもしれません。ですから、私たちアシストセンターは、そのような隠れた悩みを察知できるように、いつもアンテナを張っていなければならないと考えています。

アシストセンターに寄せられる相談の多くは、「こうすれば解決できるよ」というように、すぐに答えを出せるようなものではありません。アシストセンターの相談員は、どんな相談でも、相

談者の気持ちに寄り添って真剣にお話を聴きます。同じような相談が何度も繰り返されることも少なくありませんが、そのたびに丁寧に話を聴いて、どんな言葉をかけてあげることができるか一生懸命考えます。また、なかなかアドバイスをするところまで話が進まないこともあり、「聴くだけ」で終わってしまうこともあります。ただ、たとえ「聴くだけ」で終わってしまうとしても、アシストセンターが、子どもたちの話を聴く受け皿となることは、相談者にとって、長い目で見て意味のあることになると考えています。

私たちは、そういった日々の積み重ねが、やがて子どもたちの信頼につながるのだと信じています。

4 最後に

私たち大人は、子どもたちに対して「友達と仲良くするんだよ」、「問題が起きたらきちんと話し合いをするんだよ」、「暴力はいけないよ」というようなことを言います。しかし、近時の国際情勢は、残念ながら力がものをいうような状況にあるように思われます。もし、子どもたちに「どうして大人は暴力でものごとを解決するの」と尋ねられたら、私たち大人は何と答えるのが正解なのでしょう。大人も子どもも難しい時代に生きています。

